

(三)

翌朝にみると、八時頃静は起きて来た。そして朝飯を食ふと湯へ行くと言つて出て行つた。清も、女將も、主人も、治つたかと思つた。

晝少し前に静は湯から歸つた。髪も結び直して、羨しい程黒い毛が一本も亂れずに屹と島田に結ばれ、少し衰へた顔が湯上りでポット上氣して一入美しさを添わて居る。見るからに如何にも元氣よく、これが昨日、一日六疊に、飯も食はず、物も云はずに寝て居た静とは如何しても思はれぬ。静も亦昨日の事は夢にも見あかつた様に活々と元氣よく働いて、夜にあると生れ變つた様に愛想よく客に接して居た。殊に十時頃、昨夜の篠田が中學時代からの親友で静が夙うから岡惚れて居る山下を引つ張つて来てからあごは、一諸になつて面白そうに清と共に騒いで、兩人が歸る時あごは静は宵からのチビ／＼飲んだ酒が廻つて顔を赤く染めて居た。

獨吟床

森田 絢愿

おぼろ
靡ひけふれる入室ひま。

床とこの沈黙しんもくや、花はな鬘まげ眠ねり。
夢ゆめ舟ふね、燈あかり輝かがやかよけて。

夜よの黒瀨くろせ漕こぎて下くだれば。

苟且からそめの眼めまじろぎ、ふと湧わきぬ。
消けぬる幻まぼろし、戀こゝろの優やさ芽め。

寢息ねいきむるゝ、肉しろうの弛緩たふみ。

寤弛くぞ、枕に凭れば。
 夜の女神、とき髪、婆娑と。
 觸るよ、寒き、獨臥の床。

肉温は、毛布の柔軟に隠り。
 熱病の、頬の懼瘰に。

垂るも、哀れ、火の滲。

魂野の緑、褪せぬる香覓の見れば。

なほ、若き血の踴躍の影に。

閃く、あれや、戀の園。

紅融花の、憧憬の日に瘦れ、俯首けば。

光の小蛇。

常春の常蔭ぞ休む吾が胸に、まつはれや。

とぐる捲き、とぐる解き、遊ぶがあはれ。

二條の紅舌を吐きて。

紫の靄ぞ、立ち籠む。

道學の絆繩、忽ち、朽ちて。

生々の理も、いかで、覺む

唯々幻の美姫、白堊の温肌は

彩乳房、薔薇の膚理を透いで

うすら紅く、うすら紅く

肉ぞ戦け、血潮や狂へ、淫慾の洞の眞闇

ふとしも見しが、戀の優目光。

十勝石、切り口滑く。

流れぬ、愛の香、黒く黒く。

今口接の甘き玉搖。

潤みの綾を、佇立の謎を。

誰か悟らむ、誰か悟らむ。

妖魔の秘め露、香こばれて。

獨寢の床、若きフアウス下は眠れり。

魂藻、搔立つ、火の海。

靈の星、寂びて散りばふ浪頭。
眞帆片帆、血汐赤鏡び、失心咀の舟ぞ飛べ。

悲善の和田津海。

妖惑のミヅヲ狂めて遊戯かな。

あゝ狂詩人。

熱病の焦るゝ、肉萎は萎ねぬ。

吾を惜きね、生の想魔よ。

生のラビリント、戀の渦道。

うらぶれの旅人、何を覚めて逝く。

戀常劫の鐘の聲、いつか響かむ。

不安の日の神、いつか沈まむ。

人の世は、あやめ草。

なむら紫の花瓣いげし昨日の花甕や。

莖を漬せる汚ち水の腐れし臭。

あくどく、むれて、最重たげに。

惱める水の面、靜に濁りて。

戀の井の壊敗あはれ見ゆるは。

灰色の朝の香は、室に浸み。

吾が優額は、血の彩枯れて。

懊惱の神は、佇立みぬ。

洋燈消れて、白聖の沈黙。

無限の虚無を語るあり。

あゝ、ニヒリズム、虚無の世を。

詩人、天才、哲學者。

虚無の桂冠戴きて。

荆棘花蔭、春の日に、偽の羔子飼ふを見よ。

彼等は説きぬ。見わぬ世を、彌勒の世界。

そも亦やがて、虚無の反射。現世の壁畫。

あふ戀醒心地、虚無にして、又虚無にして。

戀の泉、兎の逝く。……我は……。

(二月二十日稿)